



「じよっぱれアオモリの星」第1巻 ©佐々木鏡石・福きつね/KADOKAWA

本県の面白さ ラノベで発信

「じよっぱれアオモリの星」第1巻

「弘大AI」発刊に産学官協力 津軽弁監修

異世界で津軽弁を話す男性を主人公にしたライトノベル「じよっぱれアオモリの星」おらこんな都会いやだ」の第1巻が28日、出版大手「KADOKAWA」（本社東京）の出版レーベル、角川スニーカー文庫から発行された。インターネット交流サイト（SNS）で話題となったウェブ小説の書籍化。作中の津軽弁を弘前大学の「弘大×AI×津軽弁プロジェクト」が監修したほか、津軽ゆかりの人たちがPR動画などに協力。漫画化も決まっており、津軽弁や本県に興味を持つてもらう機会にもなりそうだ。

（二戸崇矢）

「じよっぱれ」は異世界が舞台の冒険ファンタジーで、冒険者として活躍することを夢見て辺境の地「アオモリ・ツガル」から王都へ移住した魔法使い、「オーリン・ショナゴールド」が主人公。オーリンは強烈なまじりが原因で、周りから厄介者扱いされていたという導入から物語が始まる。著者佐々木鏡石さんは生まれも育ちも岩手県だが、

弘前市出身のマルチタレント伊奈かっぺいさんのトークなどを通じて津軽弁に慣れ親しんでいたため、主人公が津軽弁を話すアイデアを思いついた。ウェブ上で発表当初（2021年6月）は、人気が出ずわずか1カ月で打ち切りになったが、ツイッター上で「パスった」のがきっかけで22年1月から注目を集め、執筆を再開した。小説は東北地方を題材にしている。スニーカー文庫の「じよっぱれ」担当編集者が、話題性や内容自体の面白さのほか、担当自身の出身地である仙台市のご当地ネタを生かした描写もあることから、書籍化を企画したという。

書籍化に際し、地域や世代によって方言の使い方や意味合いが異なる点を考慮し、AI（人工知能）を用いて津軽弁を標準語や多言語に翻訳するシステムの実

現に取り組んでいる「弘大×AI」に監修を依頼。同プロジェクトがライトノベルの監修に関わるのは初めてで、今井雅代表は「津軽弁を文字に起こす際の課題を明らかにすることも、活動自体を広く知ってもらう機会になる」と引き受けた経緯を説明しつつ、「津軽弁は方言の中でも難解だとされているが、作品を通して面白さや良さも伝わればうれしい」と期待を寄せた。

その際には書籍化を記念し

て、津軽地方を拠点に活動するバーチャル・ユーチューバー（Vチューバー）の青森りんごさんが作品の魅力やインターネット上で紹介するアンバサダーを、弘前市出身の声優今井文也さんがプロモーションビデオの主人公オーリンの声を担当。特設サイトのデザイン協力には青森市が関わっており、「じよっぱれ」担当者によると、ウェブ版の内容に約6万字の加筆、修正を施し、細かな描写や物語の展開にも変化を加えた。佐々木さんは「協力してくれた、それぞれの道のプロフェッショナルの仕事に触れ、この小説は私の知識や経験では完成できないと実感した。青森や東北で笑えるもの、面白くものを再発見するつもりで書いたので、小説から笑える東北を見つけてくれたら」と話した。「じよっぱれ」は税別600円、全国の書店などで扱っている。

※この画像は当該ページに限って
陸奥新報社が利用を許諾したものです。
[問合せ先]弘前大学理工学研究科
E-mail:r_koho@hirosaki-u.ac.jp